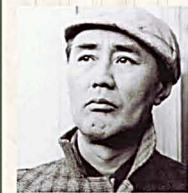


1 こん かんいち 今官一 文学碑



今官一(1909年~1983年)は、弘前市西茂森町に生まれる。東奥義塾に在学中、福士幸次郎との出会いから文学に開眼する。上京して太宰治、檀一雄らと交流を交わしながら創作活動に励んだ。戦前にも多くの作品を書くが、昭和31年に直木賞を小説集『壁の花』で受賞する。代表作に『幻花行』『巨なる樹々の落葉』がある。母校東奥義塾があった所に立っている。

2 今官一の墓 蘭庭院 西茂森町2-9

今官一は、昭和55年1月に病気のため弘前に帰ってきたが、昭和58年3月1日に弘前市内の病院で亡くなる。生家の蘭庭院の墓に眠る。今家の墓の位置は、お寺で案内を乞うと教えてもらえる。

花まぼろしの世に在らば世も  
世に在らば世も  
花まぼろしの世に在らば世も



4 いちのへ けんぞう 一戸謙三 文学碑



一戸謙三(1899年~1979年)は、弘前市本町に生まれる。福士幸次郎に師事して、仲間と「パストラル詩社」を結成する。教職に就きながら詩の実作や詩評論で活躍する。『自撰一戸謙三詩集』や四行詩集『現身』がある。一戸謙三文学碑には、津軽方言詩集『ねぶた』の序詞「弘前(シロサキ)」の一節が刻まれている。

弘前(シロサキ) 謙三  
お岩木山(ユワキサマ)ね守(マモ)らエ  
で、お城の周りを展(マ)口(ダ)がる此のあつ  
ましいおらの街(マ)ヅ(マ)...



6 かさい ぜんぞう 葛西善蔵 墓碑



葛西善蔵(1887年~1928年)は、弘前市松森町に生まれる。上京して苦学しながら小説家をめざした。「哀しき父」「子をつれて」などの私小説作品を書き、芥川龍之介とともに大正期を代表する作家と評価されている。葛西善蔵の墓の左側面に、葛西善蔵「湖畔手記」に出ている短歌が刻まれている。葛西善蔵墓石の位置は、お寺で案内を乞うと教えてもらえる。

白根山雲の海原夕焼けて  
妻し思へば胸いたむなり



8 いしざか ようじろう 石坂洋次郎 文学碑



石坂洋次郎(1900年~1986年)は、弘前市代官町に生まれる。小説家として戦前・戦後に活躍。代表作に『若い人』『青い山脈』『陽のあたる坂道』がある。小説集『わが日わが夢』は、弘前市が舞台となっている。

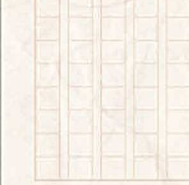
物はぞしいが空は青く  
雪は白く、林檎は赤く  
女達は美しい國それが  
津軽だ。  
私の日はまて過ぎて  
私の夢はまて育くま  
れた。  
昭和四十九年九月  
石坂洋次郎



3 ふくし こうじろう 福士幸次郎 文学碑



福士幸次郎(1889年~1946年)は、弘前市本町に生まれる。上京後、佐藤紅緑の書生となり、その薫陶を受ける。大正期、口語自由詩の詩集『太陽の子』『展望』を刊行する。関東大震災で津軽に帰郷し、『地方主義の行動宣言書』を発表して、地方主義思想の普及に努める。晩年に、古代文化研究の『原日本考』を刊行する。福士幸次郎文学碑には、詩集『展望』から『鶉』の一節が刻まれている。鶉は白鳥のことである。



胸にひそむ  
火の叫びを  
雪降らさう  
福士幸次郎

5 たかぎ きょうぞう 高木恭造 文学碑



高木恭造(1903年~1987年)は、青森市米町(現本町)に生まれる。官立弘前高等学校を卒業した後、青森日報社で福士幸次郎の地方主義の感化を受ける。これがのちに方言詩集『まるめる』として結実する。その後、満州で現代詩や小説を書く。満州医科大学を卒業して、眼科医となる。戦後、弘前市で眼科医院を開業する。高木恭造は、医業のかたわら、小説や詩など創作活動を続けた。高木恭造文学碑には、『まるめる』の『冬の月』の一部が刻まれている。



あ、みんな吹雪と同じせ  
過ぎてしまえば  
まんどろだお月様だネ  
高木恭造

7 さとう こうろく いしざか ようじろう 朝陽小学校 佐藤紅緑・石坂洋次郎 文学碑



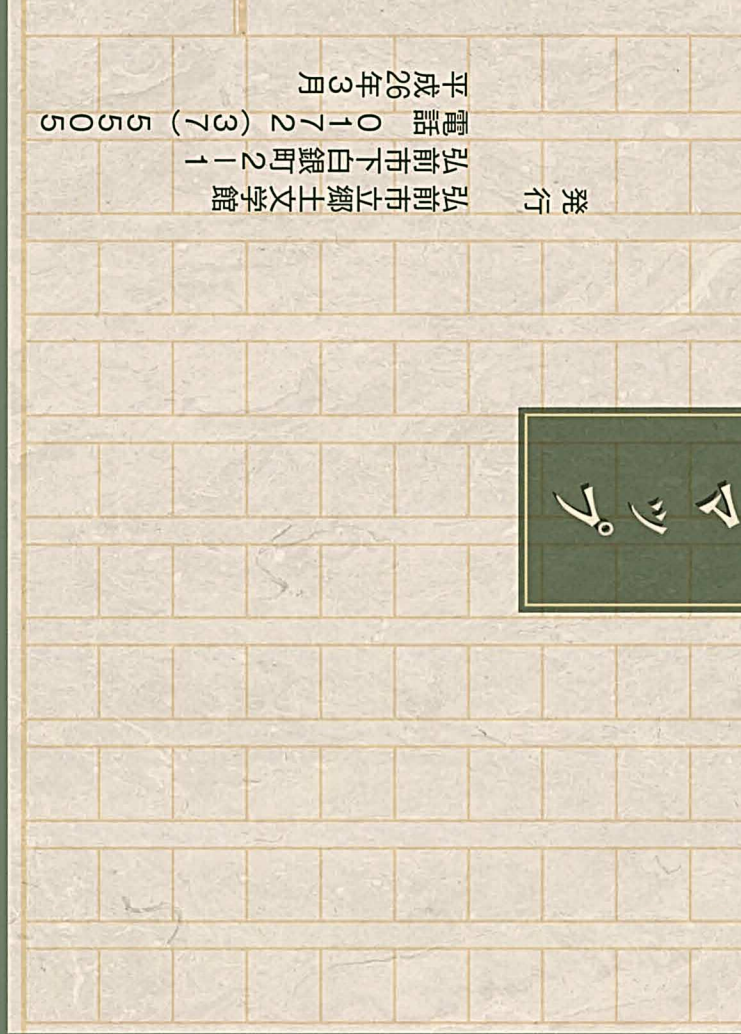
朝陽小学校には、同校を卒業した小説家・俳人佐藤紅緑と小説家石坂洋次郎の文学碑が建てられている。佐藤紅緑『希望の碑』が校庭に、佐藤紅緑文学碑と石坂洋次郎文学碑が校門脇にある。佐藤紅緑(1874年~1949年)は、弘前市親方町に生まれる。明治・大正・昭和にわたって俳句、戯曲、小説の分野で活躍した。その少年小説は少年達を熱狂させた。碑のある場所は学校の窓口で尋ねると教えてもらえる。休校日を除く。

佐藤紅緑 希望の碑 朝陽小学校 在府町36 昭和55(1980)年3月9日建立



9 石坂洋次郎の墓 貞昌寺 新寺町108

石坂洋次郎は、昭和61年10月7日、伊東市で亡くなる。墓は府中市多摩霊園にある。同年11月、貞昌寺の石坂家の墓に分骨されている。石坂家の墓の位置は、お寺で案内を乞うと教えてもらえる。



10 ださい おさむ 太宰治 文学碑



太宰治(1909年~1948年)は、北津軽郡金木村(現五所川原市金木町)に生まれる。官立弘前高等学校時代の3年間、弘前市内で下宿生活をする。太宰治は、『津軽』で高校時代を回想しているが、太宰文学の基礎が築かれた土地であった。この碑は生誕100年を記念したもの。私には愛という専門科目があるという、『津軽』の一節を刻んでいる。大学構内には、津島修治(太宰治の本名)が刻まれた「官立弘前高等学校在校生名簿」碑がある。



私にはまた別の専門科目があるのだ。世人は假りにその科目を愛と呼んでゐる。人の心と人の心の離れ合ひを研究する科目である。私はこのたびの旅行に於いて、主としてこの科目を追究した。  
「津軽より」

11 太宰治まなびの家 (旧藤田家住宅)

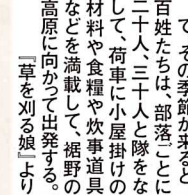


大正期の建築様式を示す住宅(弘前市指定有形文化財)で、官立弘前高校在学中の太宰治の下宿先である。太宰治が使っていた部屋は、二階の一室で、使用した机や戸棚が展示されている。平成18年、元の場所から現在地に移築されている。

12 いしざか ようじろう 石坂洋次郎 文学碑



石坂洋次郎の「草を刈る娘」文学碑は、「青い山脈」歌謡碑とともに建てられている。昭和22年に石坂洋次郎が獄温泉で執筆した「草を刈る娘」の一節が刻まれている。文学碑の建っている岩木山の裾野が小説の舞台である。

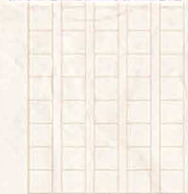


岩木山の南側になだれた広い裾野も、津軽平野の中に散在する五、六カ村の草刈り場になっていた。ここはもつと奥の炭焼き部落に通つトラックの通路に添つて、何かの便りがよかつたし、二里ばかり離れた所に温泉も湧いており、少し早目に晩飯を済ませると、ゆづり温まつて来ることもできたので、毎年の草刈りは、馬を飼つてる百姓たちにとつては、楽しみな年中行事のつぎになつてた。で、その季節が来ると、百姓たちは部落ごとに二十人、三十人と隊をなして、荷車に小屋掛けの材料や食糧や炊事道具などを満載して、裾野の高原に向かつて出発する。「草を刈る娘」より

13 くが かつなん 陸羯南 文学碑



大狼神社から東北自然歩道を歩いて10分。陸羯南(1857年~1907年)は、弘前(現弘前市)、在府町に生まれる。東奥義塾中退。上京して、太政官御用掛となり、官報局編集長となる。明治22年、新聞『日本』を創刊し社長兼主筆として活躍する。国民主義のもと新聞発行停止にも屈せず政府批判の論陣を張る。俳人正岡子規の庇護者としても知られている。陸羯南文学碑は、弘前で揮毫された漢詩一篇が刻まれている。

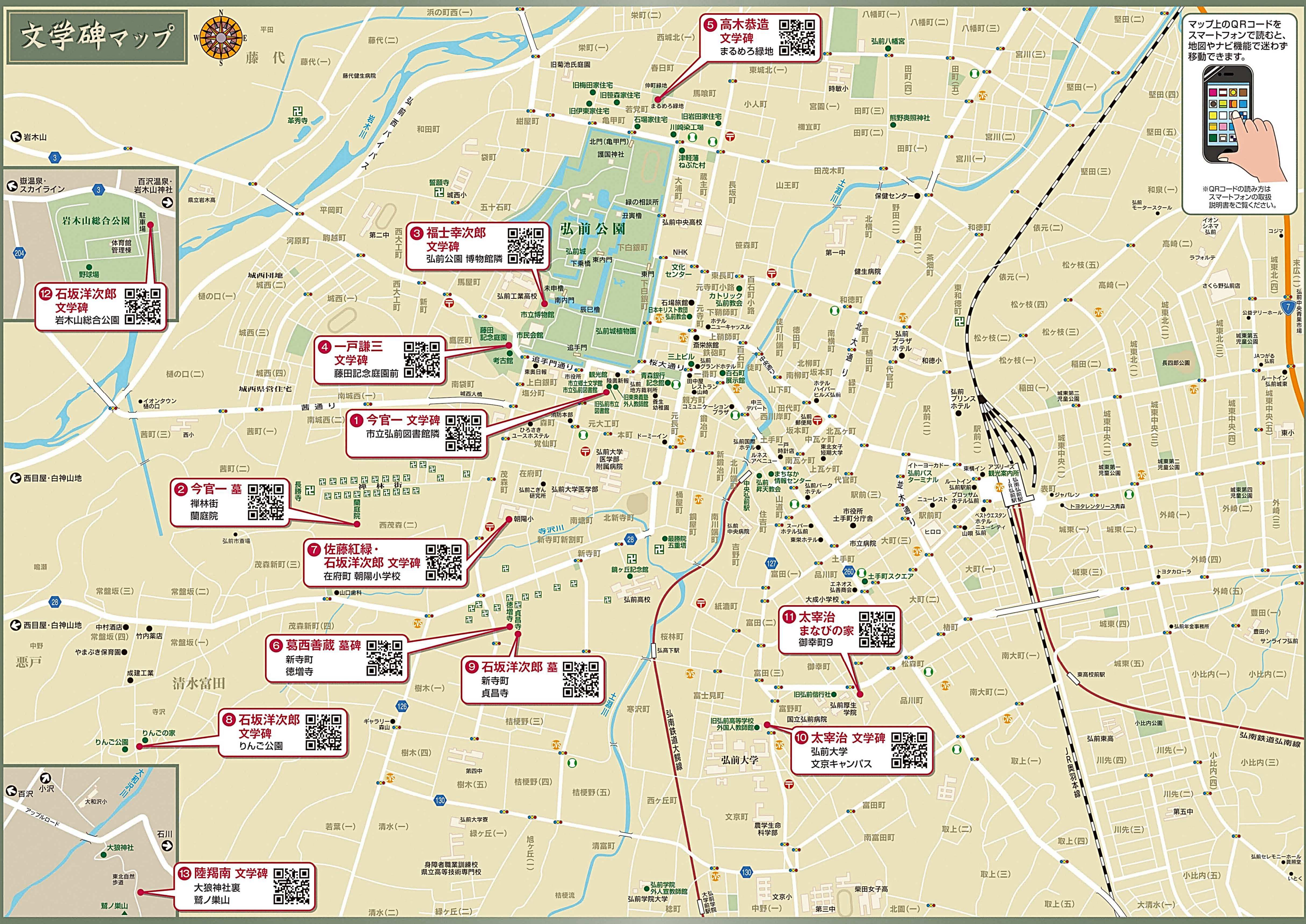


名山出名士  
此語久相傳  
試問巖城下  
誰人天下賢  
羯南

# 文学碑マップ



藤代



マップ上のQRコードをスマートフォンで読むと、地図やナビ機能で迷わず移動できます。

※QRコードの読み方はスマートフォンの取扱説明書をご覧ください。

12 石坂洋次郎文学碑  
岩山総合公園

2 今官一墓  
禅林街 蘭庭院

13 陸羯南文学碑  
大狼神社裏 鷺ノ巣山